

## 恩納村の交通と観光

新型コロナウイルスの規制も緩和され、恩納村でもレンタカーを多く見かけるようになってきました。

沖縄県は一部でモノレールが運行するのみで鉄道は整備されておらず、自動車での移動が一般的です。そのため、観光客もレンタカーでの移動が主になり、長期の休みともなると村内のホテルやレジャー施設の駐車場にはレンタカーがずらりと並びます。しかし、今のよう一般家庭に自動車普及するまで人々は徒歩、駕籠や馬車、バスを利用していました。今回は恩納村の交通と観光の移り変わりについてみてみたいと思います。

### 徒歩、駕籠

昔の旅は基本的に徒歩でしたが、琉球国時代、国頭方西海道を通って恩納間切(当時)を経由する首里王府の役人は駕籠を利用していました。役人が間切を通る時はその間切内で対応しなければならなかったため、恩納間切では山田の多幸山、喜瀬武原、伊武部で駕籠の引き継ぎが行われました。その引き継ぎのために役人を待つ場所を「御待毛」と呼んでいました。この頃の移動手段といえば馬も考えられますが、『恩納村誌』によると馬に旅人を乗せる「馬子」がごくわずかにいた程度で、さらに「馬で旅する人は、乗馬を飼うことのできる余程の資産家であった」とあります。少なくともこの頃の恩納村では、馬での



移動は珍しかったと考えられます。

時代が移り明治時代になると新聞が発刊され、紙面に県内の遠足や修学旅行の行程、個人の旅行記が掲載されるようになりました。名護方面または那覇方面へ向かう道のりに恩納村の表記を見ることが出来ます。個人や少人数の移動には駕籠も使われていたようですが、修学旅行は人数が多く、また軍事訓練の目的もあり、主な移動は徒歩でした。旅行記からは恩納、前兼久、仲泊などの地名も散見され、恩納村で宿泊した様子もうかがえます。

### 客馬車

1913年9月8日の琉球新報掲載の旅行記「道中所感」に、「仲泊には八台の客馬車がある」と書かれています。『恩納村誌』によると「客馬車は県道開通後4、5年経って現われはじめた。(略)恩納村のうちでいち早く客馬車がでたのは仲泊であった。というのは東海岸沿いには未だ県道ができていなかったため、伊波、石川、金武方面の旅人は仲泊を経由する者が多かったからである」とあり、最終的に客馬車は11台になり、待合所では客の取り合いになるほどだったそうです。村内では他に名嘉真、恩納にも客馬車があったそうです。

しかし、1917年に設立された沖縄自動車<sup>\*</sup>が那覇―名護間の乗合自動車を運行するようになると、客馬車は徐々に減っていききました。

### 観光バス

戦後、恩納村の海岸は米軍が保養地として利用していました。1953年に前兼久の海岸が一般に開放されると海水浴場として整備され、1957年には「月の浜海水浴場(現ムーンプーチン)」